

「偶然」

東京大学工学部社会基盤学科政策・計画コース 3年 田邊怜

明るくない街灯で照らされながら、予定着陸時刻から随分遅れた飛行機から降りた。エルドレッド空港を出ると、現地職員の松本さんと京都大学生の金子さんが笑顔で迎えてくれた。何日か洗っていない服に大きなリュックサックを背負った僕を見て、「避難している人みたいだね。」と気さくに接して頂いた。ケニアの小学校を回り、ナイロビからの国内線に乗って少し疲れていた僕は、とても楽な気持ちになった。安心した。

3月18日から21日まで、NPO道普請人を通じてケニアのエルドレッドのチェプラスケ村でホームステイをさせて頂いた。金曜日は道作りも手伝わせて頂いた。元々、何かしらの成果を出すためにアフリカに行ったわけではなく、ただ色々経験したかった。自分がマイノリティになり、全く異なる価値観を持つ人たちに囲まれて過ごしてみたかった。

たくさんの人と会った。そこで感じたことはとても多い。
その中の1つ、「偶然」について少しまとめてみようと思う。

エルドレッドに着いた2日目、ホームステイする村に向かう車の中。隣に現地道普請人のケニア人スタッフが座った(名前は忘れてしまった)。彼としばらく話していると、僕と同じ社会基盤学科の卒業生であることが分かった。インフラに関わるNPOで働いているのだから、当然のことと言えばその通りだが、僕はその時驚いた。なぜ道普請人で働くのか、勉強したことをどんな風に生かしているのかなど、とても興味深い話が聞けた。僕がこの道普請人でボランティアをしていなかったら、絶対に彼とは出会えなかつただろうし、こんなところに先輩ができることも無かつただろう。

ホームステイして二日目、グラディス(僕の面倒を見てくれた村の女性)に連れられて、よく分からないうちに、村の校長や役所の教育区長?の人達とお昼ご飯を食べる機会が訪れた。おいしいお肉を頬張りながら、たくさんのことを聞き、たくさんことを聞かれた。他のケニアの学校をいくつか見た後だったので、この村の学校がとても綺麗だと感じていた。その話から、日本とケニアの学校の話になった。校長が「わしが日本でスワヒリ語の先生をやったらどれくらい稼げるか」と聞いてきたのが印象に残っている。グラディスと一緒に行動していなかったら、こんな面白い体験は出来なかつただろう。

その日の午後、エイズの無料チェックの集客のために、サッカー大会をモイ大学で開いているから一緒に行こうとグラディスに誘われた。彼女の顔の広さに感心しながら、ついに行った。そこでは大学生や大学の職員が混じって雨の中サッカーをしていたのだが、雨

の中でプレーする気になれず、僕は横で見ていた。そこで大学の女の子たちと話していた。宗教や教育の話をした後、「日本でもエイズは広がっているのか」と聞かれた。詳しい知識は無いので、都市部で特に若者を中心に広がっているが、ケニアほど広がってはいないよ。と教えて、「あなたはエイズチェックを受けたことがあるか」と聞かれた。そんなことを聞かれたのは初めてだった。当然のように聞いてきた彼女たちに驚きながら、検査を受けたことはない、と言うと、「それは良くない。今すぐ受けてきた方がいい。」と言われて受けることにした。

小さいが比較的清潔なブースに入る。プライバシーのために隔離された空間で、エイズチェックを受けた。血を少し取ってから検査結果が出るまで10分ほどあって、その間に「検査結果に不安がある？」「もし陽性だったらどうするの？」などと聞かれる。びくびくしながら検査結果を見ると、安心することに陰性だったのだが、そこで「陰性だったけれども、これからあなたはどうするの？」と聞かれ、「これまで以上に気をつけます」と答えた。貴重な経験だった。あの女の子たちと話さなければ、ケニアでエイズチェックを受ける事は無かっただろう。

ホームステイして三日目、村のサッカー大会に顔を出した。少しプレーさせてもらい、仲良くなった連中とコート横で話していた。日本に興味があるからなのか、質問が絶えない。日本人とケニア人の女の子の落とし方の違いについて話した後、ぼつりと「日本に行くにはいくらかかったんだ？」と聞かれた。正直に航空券の代金を伝え、自分は親からそのお金をもらったことを伝えた。すると、「とても良い親だな。俺たちもいつか日本に行きたいよ。」彼は言った。それから自分の妹と結婚しないかと、提案された。そうすれば自分もお金を得られるし、日本に行けるかもしれない、というわけだ。今すぐ家で紅茶を飲もう、そこで妹を紹介する、というお誘いを断り、その場を後にした。

僕は彼と同じだ。僕はケニアと繋がりのある木村先生を偶然紹介していただき、その機会を親からもらったお金で生かすことができた。彼も僕と出会い、日本に興味を持ち、僕と妹を結婚させるという手段で、この機会を生かそうとしたのだ。

僕がケニアで経験した「偶然」は他にもたくさんあった。周りの人が僕を色々な所に連れて行ってくれたり、他の人に紹介したりしてくれたからだ。僕はそれを精一杯楽しんだ。

僕はそういう「偶然」を生み出せる人になりたい。グラディスや木村先生のように、誰かと誰かが、僕の縁でつながって、何か面白いものが生まれたり、変なことが起こる。

アフリカから帰って来て2カ月、そんなことを考えている。